

2011年 6月27日・しんぶん赤旗「文化欄」では

原発難民 詩人の警告 柴田三吉（詩人）

『福島原発難民—南相馬市・一詩人の警告 1971～2011』（コールサック社）を読む。

著者の若松丈太郎氏は南相馬市在住。福島第1原発が稼働したときからその危険性を訴え続けてきた詩人だ。原発事故以前に書いた、詩とエッセーをまとめたのがこの書である。

若松氏の警告と願いは届かず、危惧したとおりの惨事が起きてしまった。原発から25^{km}地点に住む氏も避難を余儀なくされた。事故直後から避難開始までの様子は、巻末の「原発難民ノート—脱出まで」に生々しく描かれている。

チェルノブイリ原発事故から8年後の1994年、若松氏は福島県民調査団の一員として現地を訪れた。その直後に「連詩 かなしみの土地」を書いている。

〈地図のうえからプリピャチ市が消えた／チェルノブイリ事故発生から四〇時間後のことである／千百台のバスに乗って／プリピャチ市民が二時間のあいだにちりぢりに／近隣三村をあわせて四万九千人が消えた（略）半径30kmゾーンといえば／東京電力福島原子力発電所を中心に据えると／双葉町 大熊町 富岡町／楡葉町 浪江町 広野町 川内村 葛尾村／小高町 いわき市北部／そして私の住む原町市がふくまれる／こちらをあわせて十五万人／私たちが消えるべき先はどこか／私たちはどこに姿を消せばいいのか〉

まさにいま、日本中の人々がここに書かれた地名を目にし、耳にしている。〈私たちはどこに姿を消せばいいのか〉。この言葉は、難民となった住民の悲鳴にも聞こえる。

若松氏のみならず、多くの人が五感を開いて危険を察知してきた。だが関係者は耳を貸さなかった。つまり、彼らは五感のすべてを閉ざしていたのだろう。人間は小さく弱い生きものだ。技術はあくまでも、それを補うための方法である。心身の感覚が衰弱したなら、理性もまた衰退する。

と紹介されています。